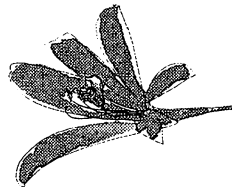


加藤辨三郎 述

浄土和讃

11

文責 本誌編集部



業繫から除かれる

佛教のどんな經典を読んでも、また解説書を読んでも、貪瞋痴の説かれていないものはありません。

この貪瞋痴を、金子大榮先生は、知情意であるといわれしました。わたしたちは昔から、知情意のバランスを大事にしなくてはいけないとか、知情意兼備でなければいけないと教えられてきました。それは儒教で説いています。その儒教という知は、知ることですが、知るは道理を知るので

す。それを知らないものが愚痴なんです。それから情、それはいかり心です。そして意は欲望です。欲望とは悪い欲望ばかりではなく、儒教ではいい欲望も盛んに説くとおもいます。たとえば、立身出世をしようという意志、その意志が非常に大事だと説いています。ただ知だけで、理窟はわかっていた。それでは情が足りないとか、あるいはやたらに意地っ張りで、意地ばかり強くてもいかないものです。要するに知情意のバランスがとれていなくてはなりません。日本でも、昔からそれが教育の根本に据えられていまし

た。おそらく文部省でも、知情意のバランスをとることを考えていたのでしょう。知情意のバランスがとれたときが、人間の人格も一番完成され、それがまた一番幸福な姿であると説かれてきました。

その極地とし、一切の業繋を除かれるのです。それは貪瞋痴からきたるところの悩みが全部除かれていくことです。ここまで来ると、迷いの世界を出て、悟りの世界へ入った境地であります。

「一切の業繋ものぞこりぬ」とは、われわれの力で悟るのではなく、無対光、比べるものない絶対の佛の光に遇えば、光のほうから除いてくださいます。すなわち佛のお光を信ずることができれば、その人は、一切の業繋からおのずから除かれてくるのです。

その無対光は、「清浄光明ならびなし」。比べものがない清らかな光であります。無対光だけで説けばよいのに、なぜ、清浄光明がここに詠われていたのであろうか。ここを金子大榮先生は、ご苦労されてお説きくださいました。

行為を浄化する

それは、わたしどもは貪瞋痴を除きたい、あるいは除い

てもらいたい希望をもっています。貪欲がおのずから廃つて、平安なところでいたいとおもいます。けれども実際には、本願を信じ念佛をもうすが、それでも欲望は靡らないことを感ぜざるを得ないわけです。前にも申しましたが、欲望の一番の欲は、男女の愛欲です。これは昔から問題にされました。この愛欲で一番苦しんだのは、男性の坊さんでした。そこでこれを征伐しなくてはなりません。たいへんきびしいことですが、自分の力で退治しようとはします。

昔は死んだ人を、野原とか、河原へ捨てました。そこで死体の捨ててあるところへ行つて、人間が腐敗していく模様をじっと見ているのです。そして、腐敗していくさまを見て、人間は不浄だと知るので。どんな美人でも、生きているあいだはきれいに見えるが、ひとたび息が切れたら、このとおり腐敗していく。ゆえに姿形のいい者を恋するのには、ほかの骨頂ではないか。それをおもい知れといったように、これを手段として、きびしい修行をしたのです。つまり不浄観です。

けれども、なかなかそうはいかないと気づかれた人がたくさんありました。そのために浄土教が生まれたのです。

非常に修行に努めたが、貪欲でも、いかりでも、愚痴でも、

とうてい自分の力で征伐することができない。しかし、それだからといって、三毒に侵されたままでいてよいというのではない。何とかして、貪瞋痴を清めたいという願いがあります。

それでは、自分の力では、貪瞋痴を征伐し切れない人を、浄土教ではどうするか。それを清めていただく。欲望を浄化していただく。男女の愛欲でも、浄化してもらったら、清浄な愛欲に変わってくるわけです。清浄光明というのは、一切を清浄にする。それができるのは、無対光なればこそで、他に比較するものがないほどすぐれた絶対の光です。本来は清らかなものであっても、われわれが汚い行為をして、なにごとくも汚くしています。如来なればこそ、汚い行為を浄化できるのです。われわれは、その如来に従うよりほかはありません。だから、清浄光明とは、われわれの行為を浄化、つまり清めていただくのです。自分自身も清めていただくが、この世のなかも清めていただくことであります。それが可能になるのは、本願を信じ、念佛もうすこの道です。

ぎりぎりの依りどころ

ですから愛欲ばかりではありません。たとえば食欲にしても、清らかな食欲というのは充分あり得るとおもいます。手を合わせて感謝をしていただく食事は、非常に清らかな食事になってくるとおもいます。

それから、いかり、腹を立てることはたしかに悪い。だが、それはわれわれが悪くしていくから悪いのです。しかし、清らかにされたいいかりもあり得るのではないかとおもいます。それは眼をつりあげてのいかりではなく、如来の光に遇った清らかないかりです。愚痴は愚痴のままでもいい、こうおおせになるのは、そのままで浄化されていくのです。無対光という絶対の光の力はそれができるのです。

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繫ものぞこりぬ

畢竟依を帰命せよ

このご和讃は、無対光のご和讃でありながら、清浄光明が先に出ています。それは、この光は清浄光明で、自分も清浄で、また他を清浄ならしめる働きがあるからです。そしてこの無対光の言葉の意味でもあります。

それから「畢竟依」です。この畢竟依も阿弥陀佛の別号

ですが、畢竟依という意味もあります。それは、ぎりぎり最後の最後まで考え尽くされたもの、その最後のよりどころです。最後のよりどころである阿弥陀佛を帰命せよ。阿弥陀佛に身も心も捧げたてまつれということです。ですから畢竟依という言葉が無対光と対になっているわけです。他に比べるものは何もない、それはぎりぎりのよりどころ、つまり畢竟依です。

『教行信証』のなかに「他力といふは、如来の本願力なり」というお言葉がありますが、それを説かれるなかに、この道は、本願を信じ念佛をもうすところの道ですよと「理をきはめ性をつくされ」てあると書かれています。理をきわめるとは道理をきわめつくすこと、考えに考えて考えつくした道理をきわめてある。性をつくすとは、ありやう、本性をとことんまできわめつくしてある。それが本願を信じ念佛もうす道であると説かれているのです。

畢竟依は、その理をきわめ性をつくした最後の最後、これ以上考えることはできない、そういう意味をふくんでいます。そしてそれがそのまま阿弥陀佛の別号になっているのです。阿弥陀佛とは畢竟依、それは道理がつくされている、性もきわめつくしてある、これ以上のものはない、こ

れ以外に考えることができない、それが阿弥陀佛にまします。ゆえに阿弥陀佛こそが絶対のみ佛です。そういうみ佛だと念佛行者は信じさせていただいています。

一切の業繫

結局は、本願を信じ念佛もうせば、おのずから、一切の業繫がのぞかれる。一切の業繫がのぞかれることは、平安な世界である。ゆえに世のなかの人が全部、本願を信じ念佛もうすようになれば、世の中はおのずから平安になるのです。これはわたくしも信じております。

酒類・食品販売

株式会社

大

志

取締役社長 草村泰稔

住所 千751山口県下関市秋根北町九番一―号
電話 下関 〇八三一―五六局―五六三二番
FAX 〇八三一―五六局―三四一〇番

ただ、容易にならないのは、なかなか遇わない、この光にもう遇わないのです。十年待っても、百年待っても、人類がこの世に出て、百万年になっても、まだ喧嘩をしていないというのは、お光に遇わない、お光に気づかせてもらわない。おれがおれがといっている。そのおれがおれがが、個人のおれがばかりでなく、いわゆる、わが国は、わが民族は、となって国家我、民族我が出るのです。

アメリカの大きな有名な銀行に、顧問会があつて、その顧問は三十人いるのです。そのうち十五人はアメリカ、後の十五人は各国から選ばれて顧問になっています。日本からは、住友化学の長谷川会長がその顧問になって出ています。たまたまこの会が開催されたとき、ホークランド戦争があつたのです。その顧問のなかには、イギリスの人も、アルゼンチンの人もいます。イギリスから出ている人は、一所懸命になってイギリスのやつていることは正当だ、ホークランド島はイギリスの領土で、その領土へアルゼンチンが無言で入ってきて占領してしまつた、ゆえにわれわれは出てもらいたいといっているのだといったそうです。アルゼンチンの人は、そんなことをいうが、あれはアルゼンチン領だつたのを、百五十年ほど前にきてとつてしまつたの

ではないかといきまっています。しかし、アルゼンチンも、三百年ばかり前に原住民から取つたものです。長谷川さんはそばにいて、なんだかくすぐつたいような感じがしたといっていました。

わたくしはその話を聞いて、イギリスもアルゼンチンも、どっちもどっちで、目くそが鼻くそを笑っているようなものだとおもいました。要するに我にとらわれているのです。イギリスもアルゼンチンも、我を振り立てていて、みんな業なのです。深い深い業で、それは何百年も前からつながつてきている業繋です。貪瞋痴を、地でやっているのです。

しかしこれも、人ごとでは決してありません。イラン・イラクの戦争でも、イスラエル・PLOの戦争でも、我を振り立てているわけです。その中近東で、日本は石油を買いてしまいます。ところが戦争になると、石油も出なくなつてしまいます。だから決して対岸の火事ではありません。日本は非常に大きな関係をもっています。それで日本でも、悩んでいます。これもやはり共業、業のつながりです。それが清められるのは、お念佛しかありません。ただ念佛のみというふうにわたくしは感じているしだいです。